

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：42202

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21401034

研究課題名（和文） 紀年銘中原青銅器の再検討による中国北方青銅器文化研究の再構築

研究課題名（英文） Reconstruction about ancient bronze culture in the north China area by bronze objects with the inscription of an age

研究代表者

小林 青樹（KOBAYASHI SEIJI）

國學院大學栃木短期大学・日本史学科・教授

研究者番号：30284053

研究成果の概要（和文）：本研究は、紀年銘中原青銅器の年代の再検討によって、中国北方青銅器文化の起源・系譜・年代の再構築を行い、韓半島青銅器文化や弥生文化の年代観の再構築を行った。研究を実施した地域は、中国の北方地域である遼寧省や内蒙古自治区である。今回の研究の推進によって、これらの地域における青銅器編年の実年代が確定した。そして、この結果をもとに、中国北方地域の青銅器の系譜、そしてこれらの東方地域への影響について新しい見解を提示した。

研究成果の概要（英文）：At central ancient China, there are many bronze objects with the inscription of the age as the Yan Guo. I reconstructed research of the northern China area based on the data for the origin, genealogy, and the age, so that result should be re-studied the problem of the culture of South Korea and Japan. This time, I investigated in Liaoning and Inner Mongolia around northern China area. By promotion of this research, the age of bronze objects in these areas become clear. On a basis of this result, I presented a new view about some problem as the origin of the bronze objects in around northern China area, and the influence on east area.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,300,000円	690,000円	2,990,000円
2010年度	1,600,000円	480,000円	2,080,000円
2011年度	1,900,000円	570,000円	2,470,000円
年度	円	円	円
年度	円	円	円
総計	5,800,000円	1,740,000円	7,540,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：紀年銘青銅器、中国北方青銅器文化、燕国、遼寧、内蒙古、遼西式銅戈

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究立ち上げの契機

日本の周辺地域との広域編年において実年代が判明するのは、銘文のある青銅器や暦年史料が古くから存在する中国中原青銅器である。弥生時代の実年代を考える議論においても、考古学的方法論でそれを検証する根

本は中原周辺地域で発見される中原青銅器の年代であった。

中原の殷から戦国期にかけての青銅器については、日本では林巳奈夫による一連の青銅器研究による林の年代観（『殷周時代の青銅器研究』吉川弘文館 1984、『殷周時代の青銅器紋様の研究』吉川弘文館 1986、『春秋戦

國時代青銅器の研究』吉川弘文館 1989) が今日まで大きな影響をあたえている。しかし、林による研究からすでに四半世紀が経過し、中国における発掘調査の進展により、再検討の必要があると考えられる。また、中国では、これまで郭沫若(『两周金文辞大系図録考釈』1957 年)や陳夢家(『六國紀年』1957、『西周銅器断代』(『陳夢家著作集』中華書局 2004 収録)などの 20 世紀半ばを中心とする時期に活躍した青銅器研究者による年代研究が出土青銅器の年代を考察する際のひとつの基準となってきたが、近年では関連諸科学との連携による「夏商周断代工程」(『夏商周断代工程 1996-2000 年階段成果報告(簡本)』世界出版社、2000)にみられように紀元前 2 千年紀の、青銅器を含む実年代の再検討がおこなわれている。

一方、国内では、2003 年から始まった国立歴史民俗博物館による弥生時代の年代研究の進展が、弥生時代の考古学的な実年代の根拠を与えてきたこれまでの年代の誤りを表面化させ、その結果、中国北方青銅器の年代の大幅な見直しを促した。本研究は、こうした研究動向の中にあつて、中国中原青銅器の編年と実年代の再検討を行うものであり、この成果は中国中原や北方地域の青銅器研究の問題にとどまらず、青銅器の直接流入や影響を与えられた日本列島の弥生文化などの周辺地域の青銅器文化の研究において時間軸を考える最も大きな基準となると考える。

(2) 研究のための準備状況

また本研究は、文部科学省科学研究費補助金学術創成研究費(平成 16 年度～平成 20 年度)、「弥生農耕の起源と東アジア」—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—(研究代表者:西本豊弘)研究において創成された研究である。この研究のなかで、分担者であった研究代表者と研究協力者の石川岳彦は、戦国時代の燕国の青銅器の年代に関連して、陳夢家の研究による青銅器銘文をもとにした年代観を下敷きにした日本の中国中原青銅器研究の大きな柱である林の研究に問題があることを明らかにした(石川岳彦「春秋戦国時代の燕国の青銅器」春成秀爾・西本豊弘編『新弥生時代のはじまり第 3 卷』雄山閣、2008)。これが今回の申請の最初のきっかけとなった。

(3) 研究の妥当性と期待される成果

その後、研究代表者は、凌河以西(遼西)において、在地系青銅器である遼西式銅戈を発見し、これに伴う土器や他の青銅器の様相が、新しい修正年代に合致したものであることを明らかにした。そして、この銅戈が朝鮮・日本の銅戈の起源であり、その年代が弥生時代の年代にまで影響することを明らか

にした。すなわち、既存の年代観から新しい年代観への修正はほぼ妥当性をもち、それにより朝鮮・日本の研究にまで影響を与えることが明らかになったのである。また、研究代表者は遼寧式銅劍の起源についても検討を進め、戦国時代だけではなく西周期に遡る時期の青銅器の年代についても再検討が必要であることを明らかにした。以上の経緯から、戦国時代だけではなく中国北方青銅器の年代の再検討の必要性を認識するに至り、さらにこの成果は弥生文化の青銅器の起源についての研究にも貢献できると考える。

なお、本研究を推進するにあたり、研究期間中に以下の研究者諸氏の協力を受けた。

李新全(遼寧省文物考古研究所副所長)

塔拉(内蒙古文物博物院院長)

宮本一夫(九州大学人文社会学院教授)

春成秀爾(国立歴史民俗博物館名誉教授)

宮里修(元早稲田大学文学学術院助教・高知県埋蔵文化財センター)

石川岳彦(国立歴史民俗博物館)

村松洋介(元釜山大学大学院・國學院大學伝統文化リサーチセンター嘱託学芸員)

金想民(九州大学大学院)

2. 研究の目的

内蒙古自治区と遼寧省を中心とする中国北方地域は、朝鮮半島及び、日本列島の弥生文化の青銅器(以下、「弥生青銅器」と略称)の起源の地と考えられている重要な地域である。当地域の青銅器の年代観は、これら青銅器に年代的根拠を与えていた「紀年銘をもつ中原青銅器の研究」に重大な問題があることが今回明らかになったことにより、100 年単位での大幅な変更が必要となった。

本研究の目的は、こうした紀年銘中原青銅器の年代の再検討によって中国北方地域における青銅器の年代と文化に関する研究の再構築を行うことにある。以上の研究の過程で中国北方青銅器文化の起源・系譜・年代の再構築は、そのまま弥生青銅器の起源に結実するので、弥生時代の青銅器(以下、「弥生青銅器」と略称)の起源についても明らかになる。

このように、本研究の特色は、既存の年代の基準を大きく修正する点にあり、将来的な発展的研究のための基礎研究である。今回の年代再構築に向けた視点は、本研究の独創的観点である。また、中国北方地域の研究であると同時に、たとえば日本の弥生時代の年代や青銅器の起源といった研究に影響を与えるという、研究のグローバル化に貢献できる特色をもつ。

日本を含む東北アジアの青銅器文化の年代を考える際には中国中原北部(華北)地域の青銅器の年代の再検討が極めて重要であり、当該地域の土器編年や周辺地域における

青銅器編年の実年代研究の基礎となることが予想される。そしてこの再検討作業による結果は、将来的には東アジアの古代文化を再構築するひとつの基準となりうるであろう。

3. 研究の方法

本研究の方法は、基本的に近年の青銅器関連出土資料による今日までの青銅器年代研究の見直しを中心に、中国における「夏商周断代工程」など近年の青銅器研究を検討もおこないつつ、中国中原青銅器の年代観の再検討をおこなう。上述のように、紀年銘をもつ中原青銅器の再検討については、すでに検討を行った戦国時代の燕国の青銅器の年代の再検討をベースに、年代体系を構築し、内蒙古や遼寧地域の青銅器文化のなかに流入した中原青銅器の年代について検討を実施する。この年代研究の過程で、内蒙古や遼寧地域の青銅器文化の在地的青銅器について、銅矛、銅鐸、多鈕鏡などを中心に検討を行う。

4. 研究成果

本研究では、当初、中原における中国中原青銅器の検討を最初に検討する予定であった。しかし、当該資料の観察などができない状況にあり、これらは報告資料の収集によることとし、現地調査については、内蒙古自治区と遼寧省を中心とする中国北方地域において実施した。そこで検討を行った諸点は、中国北方青銅器文化の再構築をもたらすだけでなく、当初の目的でもあった。朝鮮半島及び日本列島の弥生文化の青銅器の起源に大きく関わるものであった。以下では、(1)から(3)において、年度ごとにその調査の成果の概要を述べる。そして、(4)と(5)において得られた研究の成果の国内外における位置づけについて記し、最後に(6)において今後の展望について述べる。

(1) 平成 21 年度の調査成果

本年度は国内での調査研究と中国での調査を実施した。国内での調査では、東京大学文学部考古学研究室所蔵青銅器の目録作成を行い、また中国中原における紀年銘青銅器の集成作業を開始した。一方、中国での調査については、遼寧省における調査を実施した。

調査は、遼寧省の瀋陽、遼寧省文物考古研究所を基点に、遼寧省博物館、遼東地域（遼陽博物館、寛甸博物館）において、研究協力者 5 名の協力により 10 月に実施した。瀋陽では北方地域の年代を考える上で重要な鄭家窪子遺跡の資料、遼陽博物館では当地域の遼寧式銅劍の鋳型資料の新出資料、寛甸博物館では遼東で初となる遼西式銅戈系の資料を実見することができた。いずれも、中国北方地域の青銅器の年代を考える上で重要であるとともに、本研究推進の上でも重要な資

料である。また、さらに重要な資料の存在についての情報も遼寧省文物考古研究所において知ることができた。

(2) 平成 22 年度の調査成果

本年度は国内の資料調査および中国での調査と韓国での補足調査を実施した。

調査は、遼寧省の瀋陽、遼寧省文物考古研究所を基点に、遼寧省博物館、遼東地域（本溪市博物館、撫順市平頂山博物館、阜新博物館）において、研究協力者とともに 10 月に実施した。本溪市博物館では、馬城子遺跡などの北方地域の年代を考える上で重要な各遺跡の資料を実見し、次に撫順市平頂山博物館では当地域の鋳造鉄器と土器の新出資料を実見することができた。本地域の鋳造鉄器の資料は、戦国燕の東方進出と連動して拡散したものであり、紀年銘中原青銅器の年代をさらに補強することができる点が明らかとなった。

なお、鄭家窪子遺跡など重要な資料群の大部分が韓国京畿道博物館に展示のため搬出されており、中国北方地域の青銅器の年代を考える上で重要であることから韓国において補足調査を実施した。国内の資料調査は、東京大学文学部所蔵の牧洋城出土資料について実施した。以上の成果については、中国考古学会などにおいて概要を報告し公表した。

(3) 平成 23 年度の調査成果

本年度の調査は、北京市と内蒙古自治区のフフホト・オルドス地域における資料調査を予定通り冬季に実施した。調査は、北京にて中国社会科学院考古研究所と国家博物館、オルドスにて鄂爾多斯青銅器博物館、フフホトにて内蒙古文物考古研究所、内蒙古博物院、内蒙古博物館等で調査を実施した。調査機関については、当初の予定から変更したものもあるが、ほぼ当初の予定を達成することができた。北京市での調査では、春秋戦国期における燕国の青銅器と鋳造鉄器関連遺跡と遺物に関する最新情報について入手することができた。

また、内蒙古自治区における調査においては、紀年銘中原系青銅器を出土している小黒石溝遺跡と南山根遺跡の青銅器（多鈕鏡や銅劍、銅矛など）の実物の詳細な観察が可能となった。同時に、オルドス青銅器文化の遺物についても、多数の実物観察の機会を得ることができた。また、年度末には、遼寧省文物考古学研究所から遼寧省における当該研究にとって重要な資料が出土しているという情報を得て、錦州市博物館、朝陽市博物館を訪問し、合わせて、内蒙古自治区のゴウカンキ博物館と赤峰市博物館も訪問した。この調査において、遼寧省と内蒙古自治区における

中国北方青銅器研究の再構築に関わる新資料を多数実見することができた。

以上の検討によって、今後、中国北方青銅器文化の起源・系譜・年代の再構築に関する研究が進展し、朝鮮青銅器文化や弥生文化をはじめ、東南アジアなど中原の周辺地域であるアジア全体の年代観の再構築研究に大きな影響を与えるであろう。

(4) 平成 21・22 年度の研究成果

まず、2009 年と 2010 年に遼寧省の遼東地域において進めた調査では、以下の 6 つの問題を検討した。

第 1 の検討は、鄭家窪子遺跡 6521 墓出土資料の再検討であり、特に銅剣について新発見の遼陽出土銅剣鑄型との技法の共通性を明らかにした上で、韓半島における同時期の遼寧式銅剣との年代的同時性を明らかにした。

その他、第 2・第 3 の検討として、本遺跡出土のラップ形青銅器と多鈕鏡についても詳細な観察から韓半島との関係を論じた。なお、遼陽出土鑄型のなかには、新出の銅面鑄型があり、第 4 の検討としてその系譜と用途について検討を行った。

第 5 の検討は遼西式銅戈の問題であり、遼東で同種の銅戈が出土したという報告を受けて再検討を行った結果、別系統のものであることが明らかとなった。

第 6 の検討は、遼東における新出の鑄造鉄器の資料群の観察と即出資料の再検討であり、その拡散が戦国燕の領域支配の東方への拡大と連動し、青銅器と同様に年代問題を考える上で重要な指標であることを明らかにした。

(5) 平成 23 年度の研究成果

本年度は、主に春秋・戦国期の遼寧地域における青銅器・鉄器関係の遺跡・遺物などの新出資料を検討することで、当該時期の問題にアプローチすることを目的とした。この成果は、2011 年と 2012 年に遼寧省の遼東地域において進めた調査を受けてのもので、以下のように 4 つの問題を検討した。

第 1 の検討は、遼西式銅戈の問題であり、遼東で出土した 2 例目の遼西式銅戈の報告を受けて再検討を行ない「遼寧式銅剣」と呼ぶことを提案した。

第 2 の検討は、遼寧における銅斧の編年と年代が提起する問題であり、銅斧が年代を考える指標になる点を検討した。

第 3 の検討は、近年の遼寧地域における鉄器関連資料と燕化の問題であり、本溪周辺の戦国時代の燕関連の資料と鉄器の観察と再検討である。

第 4 の検討は、明刀銭の再検討であり、燕下都遺跡出土の明刀銭を含む貨幣の集成資

料で再検討し、型式編年を再構成した。以上の 4 つの検討は、今後、遼寧地域に当該時期の年代の重要な指標となるであろう。

また、本年度には、3 年間で実施した紀年銘中原系青銅器のなかでも、中国北方地域に強い影響を及ぼす春秋・戦国期の燕国における出土資料の集成と分析を実施した。この研究は、研究協力者の石川岳彦氏が実施し、これまでに多数の研究論文などを公表している。

(6) 今後の展望

中国北方青銅器文化の再構築は、本研究の目的通り、春秋・戦国期の燕国における出土資料の集成と分析により、基礎的な年代観の構築と北方各地の編年の併行関係に実年代を与えることが今まで以上に可能となった。同時に、遼寧省と内蒙古自治区の調査においてさらに重要な資料を新たに発見したことも大きい成果であった。こうした成果のうち、特に年代のはっきりしている遼西式銅戈の類例を、遼東地域において数例、発見できたことは、この遼西式銅戈の変形態態の細形銅戈を有する韓半島と日本列島の弥生文化の年代を中心とする問題に大きくせまることになった。また、今回の各地の調査で新発見の続いた燕系遺物の類例が、韓半島や日本列島でも出土している点が新たに問題となり、今後は本研究の延長として韓半島と日本列島での研究が焦点となるであろう。

今後は、中国北方青銅器文化諸地域の新資料に注意しつつ、韓半島と日本列島を含めた東アジア東南部一帯での広域な視点での研究が必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① 小林青樹、細形銅矛の起源、栃木史学、査読有、25 号、2011、13-37

② 小林青樹・春成秀爾・宮本一夫・宮里修・石川岳彦・村松洋介・金想民、遼東における青銅器・鉄器の調査と成果、中国考古学、査読有、第 11 号、2011、201-222

③ 小林青樹、中国北方地域の動物意匠と弥生文化、栃木史学、査読有、第 26 号、2012、23-48

[学会発表] (計 4 件)

① 小林青樹、韓国における剣崇拝の伝統と韓国式銅剣の出現時期—遼寧式銅剣と岩刻画一、東北亜細亜考古学研究会、2009 年 7 月 11 日、早稲田大学

② 石川岳彦・小林青樹、春秋戦国期の燕・遼西・遼東における鉄製品の諸問題、日本中国

考古学会、2009年11月21日・22日、筑波大学

③小林青樹・春成秀爾・宮本一夫・宮里修・石川岳彦・村松洋介・金想民、遼東における青銅器・鉄器の調査と成果、日本中国考古学会、2010年11月27日・28日、奈良文化財研究所飛鳥資料館

④小林青樹・李新全・春成秀爾・宮本一夫・宮里修・石川岳彦・村松洋介・金想民、遼東における青銅器・鉄器研究の現状、日本中国考古学会、2011年12月2日・3日、東京大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://web.me.com/tochitanarc/サイト/青銅器研究.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 青樹 (KOBAYASHI SEIJI)

國學院大學栃木短期大学・日本史学科・教授

研究者番号：30284053

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：